消防のおじさんご苦労さま
みんなで火の注意をしよう

豆記者

一月四日は出初め式。ことし一年火事がないようにと毎年行われていますが、冬はとくに火災の多く発生する時期です。

そこで、市内四校の小学校から推選されました四人の子供たちにお願いして、「豆記者」となって、消防署の現状や、わたくしたち市民の注意しなければならぬことなどを聞いていただきました。

■豆記者のお友達
上杉利美君（東光小六年）
小田原次夫君（留小六年）
江州康子さん（港北小五年）
森下裕美子さん（緑丘小四年）

署長さんから説明を聞く、豆記者たち
左から小田原、上杉、江州、森下のみなさん

わたくしたち四人の豆記者は、留萌市の消防署を訪ねてみました。

はじめに、署長さんの部屋で、岩崎利武署長さんにあい、消防のことや、火災のことについていろいろとお聞きしました。

署長さんの話によりますと、わたくしたちの留萌市は、北海道だけでなく、日本全体でも一番火災の多い危険な市であることを聞かされ、まったく驚いてしまいました。

人口一万人について一年間に発生する火災は、平均五回位なのに、留萌市では人口一万人当り十四回も発生しているということです。

とくに市内でも一番危険な地区は、錦町の大通りで京都市の十五倍もの危険にさらされているのだそうです。

そこで、このように危険な留萌市をなんとかして火災からまもり安全な生活ができるようにと、東京大学の偉い先生に頼んで、科学的に調査したところ、

・マサぶきの屋根をトタンにする。
・板壁の家を、焼えにくい防火壁にする。
・消防車を増やす。
・水の便利をよくする。

ことが必要だということでした。

とくに、この調査の中で駅前から神社下までの大通りの両側に並ぶ家と、国保西病院から十字街を通って岸壁までの大通りの両側にある家を、全部三階建の防火建築にするようにと注意されたということです。

これは市の中心地に火事が発生したときに、火事が大きくならないようにする大切な役目をするものだそうですが、それよりも大通りの両側に、三階建のりっぱな家がズラッと並んだら大都市みたいになるのではないかと楽しみです。

消防署のおじさんたちは現在四十四人いますが、一応国的な基準からみると留萌市では九十人もの署員が必要だということです。

このため、わたくしたちのお父さんが、消防団員となって、火事が出た時に、お伝いをします。

しかし、消防署のおじさんたちは、火事のない日もどうして火事を防ぐか、又早く消すとか、一生懸命に勉強、とくに年末、年始には全員休みもなく、勤めておられることを知り、本当にご苦労さんと思いましたが。

そこで、少しでも火事をなくすれば、消防署のおじさんたちの苦労がなくなると思い、火事の原因を聞いてみました。

それは、なんといっても火の不注意だといわれました。なかでも最近は石油コンロを使うようになったため、この火災が増えているということです。

それに、子供たちの火遊びによって、毎年一、二件火事があると聞かされ、本当に注意しなければならないことだと思いました。

また、煙筒そうじをしないため、煙筒に火が入ったり、火の粉が飛んで火事になることもあるので、煙筒そうじも忘れられないことの一つです。

望ろうでは、毎日消防のおじさんが、見張りをしていますが、望ろうで発見した時は、火事が大きくなってしまい、手おくれの場合が多いということです。

昨年は四十二回火事がありましたが、二件だけは望ろうから発見しただけで、あとは市民から知らせてきたといっていました。

消防署の内を見学中の豆記者
―タンク車の前で―

火事をみつけたときは、電話であれば、「火事」とだけいえば消防署がでますので、落ちついて場所をはっきりお教えて下さい。といわれました。

いままでも、せっかく電話でお知えてきても、あわてて場所をまちがえてお知えたり、はっきりいわない人があるそうです。

消防署に電話がくると、署内に非常ベルが同時に鳴り、出動するまで、わずか十二秒の早さですが、火事場に行くと、大変な人だかり。これがまた消火のじゃまになります。署長さんは家から飛び出して、火事場に見物に行かないように注意されました。

北海道、なかでも留萌の冬は雪が多く、消防のおじさんたちも大変にご苦労と思います。

それなのに、せっかくの貯水槽に石や、板きれを投げていたずらしたり、除雪もしない人たちの多いのは本当に注意しなければならないと思いました。

署長さんから話を聞いたあと、消防ポンプや署内の仕事ぶりを見せてもらいましたが、終ったあと、火事は九九%が火の不注意で、その火事も早く見つけて、早く消すことが大切だと署長さんからいわれたことを思い出し、わたくしたち皆んなが、ふだんから火の注意をしなければ火事をなくすることはできないと、つくづく感じさせられました。

（おわり）

わたくしたちの歌

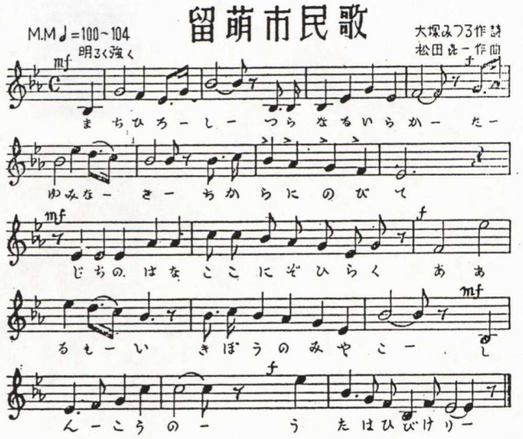
市民歌を歌おう！

元旦から愛の鐘で放送

留萌市民歌

M.M♩=100~104　明るく強く

大塚みつる作詩
松田喜一作曲



留萌市にも、わたくしたちの歌々市民歌々があるのをご存じですか。

留萌市では、昭和二十二年十月一日の市制施行を記念して「留萌市民歌」を作りましたが、その後すっかり忘れられてしまったようです。

全国的、全道的な集まりの席で、各地の人たちが、自分たちのまちの歌を、誇らしげに歌うのをよく聞きます。

留萌市の姿を唱った市民歌を、もう一度普及し、わたくしたちの郷土留萌を広く紹介するとともに、より一層愛そうではありませんか。

市民歌の普及を積極的に進めますが、その一つとして、留小校の高橋富男先生の編曲によって、元旦から愛の鐘で放送します。

あゝ留萌 我等の都

作詩　大塚　みつる
作曲　松田　喜一

一、市広し　連なるいらか
たゆみなき　力に伸びて
自治の花　ここにぞ開く
あゝ　留萌
希望の都　新興の
歌は　ひびけり

二、海深し　潮満つ朝
天産の豊けき積みて
船出なす　とどろの汽笛
あゝ　留萌
時代の港　躍進の
意気は　昂れり

三、雲清し　凍れる星座
嚔冽の　郷土に芽ぐむ
新たなる　文化の誇り
あゝ　留萌
我等の都　共栄の
愛は熾れり

留萌市民歌募集

新有権者の感想文募集

●感想文の内容と標題
新有権者としての選挙に対する自覚を内容とするもので、標題は制限しません

●枚数
二百字詰原稿用紙十枚以内または四百字詰原稿用紙五枚以内

●応募資格
昭和十五年一月一日から同十六年十二月三十一日までに生まれた者。

●締切期日
昭和三十六年二月五日（当日付消印の郵送作品は受け付けます）

●提出先
東京都千代田区霞ケ関一の二
自治省　選挙局管理課

●入選発表
昭和三十六年四月五日付公明選挙時報に発表するとともに、入選者に通知します。

●賞状及び賞金（自治大臣賞）
一等（一）　一万五千円
二等（二）　五千円
三等（三）　三千円
佳作　若干

●応募注意
1　応募者の住所、氏名（ともにふりがなを付けること）、性別、生年月日及び職業を原稿の末尾に明記すること（枚数制限外）
2　感想文封入の封筒の表面左下に「感想文在中」と明記のこと。
3　応募作品はお返ししません。
4　優秀作品がない場合は、入選者がないことがあります。
5　入選作品は、公明選挙運動のために、自由に使用させていただきます。

冬休み中の子どもの生活

十二月下旬から市内の学校は一せいに長い冬休みに入りましたが、この期間は年末年始という特別な時期にもまたがっていますので、子どもの生活指導にはとくに気をつけましょう。

1　父母は年末年始の忙がしさに気をとられて子どもを放任したり、いらいらした態度で子どもに当らないこと。
2　一日に一度はつとめて一家のくつろぐ時間を作ること。
3　忙がしいときなどには、子どもの能力にふさわしい仕事を与え、働くよろこびと自信を持たせるようにすること。そして子どものした仕事に対しては、ねぎらいと励ましを忘れないようにすること。
4　こずかいの使い方にも気を配るようにし、その使い方についても、なるべく自然の会話の中で指導するようにすること。
5　交通と安全には十分注意し、道路上のスケートなどは絶対にやめさせること。
6　スキーなど、冬のスポーツで外出することも多くなりますが、帰宅時間をはっきりさせ同伴者がだれであるかを必ず聞いておくこと。

▽　△